加納寛編

書院生、アジアを行く

――東亜同文書院生が見た20世紀前半のアジア

あるむ／2017年3月／286頁／3000円＋税

広中一成

本書は、東亜同文書院の「大調査旅行」をテーマにした一一人の研究者による学術論集である。東亜同文書院とは、アジア主義を掲げた東亜同文会が、一九〇一年に上海に設立した日本の在外教育機関である。一九三九年の大学昇格をへて、日本の敗戦で閉校するまでの四五年間に、およそ五千人の学生を育てた。戦後、旧東亜同文書院大学教職員と日本の旧植民地にあった大学の関係者が集まって新しい大学を設立する構想が生まれ、一九四六年、愛知県豊橋市の旧陸軍用地に愛知大学が創設された。

大調査旅行は、東亜同文書院の名物といえる恒例行事で、最終学年に達した書院生が数名の班に分かれてアジア各地を調査し、その結果を『中国調査旅行報告書』としてまとめた。その報告書は、今日、民国期の中国社会を知るうえで貴重な資料となっている。

愛知大学は、一九九三年に旧東亜同文書院同窓会の滬友会と東亜同文会を継承した霞山会から得た基金をもとに東亜同文書院大学記念センターを開設し、東亜

同文書院に関する資料の収集と研究を本格的に開始した[1]。

その後、同センターでは、藤田佳久愛知大学文学部教授（現名誉教授）を中心に大調査旅行研究が精力的に進められ、大調査旅行の記録をまとめた全五巻からなる『東亜同文書院・中国調査旅行記録[2]』シリーズが発表された。これら研究成果が認められ、二〇一二年度から、東亜同文書院大学記念センター研究プロジェクト「東亜同文書院を軸とした近代日中関係史の新たな構築」が文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に選定された（二〇一六年度まで）。そして、この研究プロジェクトを進めるにあたって、新たに五つの研究チームが結成された。

そのひとつの「「大調査旅行」からみる近代中国像」には、アジアを専門領域とする各分野の研究者が集まり、藤田のこれまでの大調査旅行研究の蓄積をもとに、これまでにない多角的視点から研究を試みた。さらに、同研究グループは、二〇一二年度から毎年シンポジウムを開催し、研究成果を世に発信し続けた。その研究の総決算としてまとめられたのが本書である。

本書の構成と各章の内容

本書の構成は以下のとおりである。括弧内は各章の執筆者である。なお、第三部第七章から第九章までと、第四部第一一章は、科学研究費補助金基盤研究(C)「近代日本青年の「南方」体験：中国人コミュニティーとの接触の実像」（二〇一五年～二〇一七年度、課題番号15K01896）の調査成果の一部と、愛知大学人文社会学研究所「南方における近代日本青年の足跡」研究会の調査成果の一部が含まれている。

まえがき（加納寛）
第一部　総論
第一章　東亜同文書院生の大調査旅行における辺境地域調査（藤田佳久）
第二章　満洲地域史研究における『東亜同文書院大旅行誌』の史料的価値（荒武達朗）
第二部　北方の大調査旅行
第三章　明治末期における東亜同文書院のモンゴル大調査旅行（ウリジトクトフ）
第四章　書院生の内モンゴル中部の商業経済調査について（暁敏）
第五章　内蒙古自治区赤峰市街地の都市構造――一九一〇、二〇年代と現在の比較（高木秀和）
第三部　南方の大調査旅行
第六章　四川の黒水チベット族と「猓猓子」伝承（松岡正子）
第七章　『大旅行誌』の食記述にみる書院生の心情変化――「雲南ルート」選択の意義を探る（須川妙子）
第八章　『大旅行誌』の思い出に記された香港――大正期の記述を中心に（塩山正純）
第九章　書院生、東南アジアを行く!!――東亜同文書院生の見た在留日本人（加納寛）
第四部　日本の勢力圏における大調査旅行
第一〇章　書院生のまなざしに映る二

○世紀前半満洲地域の日本人（荒武達朗）

第一一章　大調査旅行における書院生の台湾経験――〝近代帝国〟を確認する営み（岩田晋典）

第一二章　日本統治下の朝鮮半島へ入った大調査旅行の書院生たち――彼らの意識と経験を中心に（武井義和）

第一部は、本書全体を読み解くうえで重要となる基礎知識と基本文献について論じている。第一章では、約七〇〇に及んだ調査コースのうち、本書の着眼点である中国辺境地域の調査を取り上げ、大調査旅行全体を拡大期（一九〇七～一九一九年）、円熟期（一九二〇～一九三一年）、制約期（一九三二年以降）の三つの時期に分けて分析し、書院生の目から見た二〇世紀前半の中国辺境地域の変容を考察している。

第二章では、大調査旅行の記録をまとめた『東亜同文書院大旅行誌』（以下、『大旅行誌』）について、史料的価値と研究で用いるうえで注意すべき記述内容の問題点を指摘している。

第二部以下は、大調査旅行を北方（第二部）、南方（第三部）、日本の勢力圏（第四部）に分け、各地域で具体的にどのような調査が行われたのか検証している。第三章では、中国北方辺境の内モンゴルで大調査旅行が行われるようになったきっかけや調査内容などを、各調査隊の報告書と調査記録をもとに編纂された『支那省別全誌』を使って考察している。

第四章では、内モンゴル中部での大調査旅行で行われた商業調査に着目し、調査の方法や内容の特徴について分析している。特に同章では、内モンゴル中部の商業都市である多倫（ドロン）で行われた書院生による調査について言及している。満洲事変以後、日本が中国大陸に勢力を広げると、満洲国にほど近かった多倫は、満洲と内モンゴルをつなぐ場所として、重要な位置にあった。書院生の多倫での調査は、当時の多倫をめぐる日中関係を知る貴重な史料となっている。

第五章では、東部内モンゴル地域の中心地であった熱河省（現河北省北部）赤峰市の市街地が、一九一〇年代と二〇年代にかけてどのように変化したか、大調査旅行の報告書、ならびに執筆者の現地調査をもとに検証している。

第六章では、民国期に略奪殺人集団「猓猓子」として怖れられたという伝承を持つ四川省黒水チベット族の社会慣習について論じている。黒水には、書院第二七期の班が調査旅行に訪れていた。執筆者は彼らの調査報告書などを分析して、彼らが黒水で何を体験し、それを彼らなりにどう評価したのか検討している。

第七章では、『大旅行誌』にある大調査旅行中の書院生の食に関する記述から、彼らがなぜ雲南を調査コースに選んだのか考察している。過酷な調査旅行で書院生の心を癒やしたのが食事であった。特にフランスの影響が及んでいた雲南では、ワインやパンなど書院生が日常ではあまり味わうことのできなかった西洋食を口にすることができた。

第八章では、『大旅行誌』の記述をもとに、南方コースの中継地であった香港を

訪れた書院生が、同地をどのような目で観察し、そこからどのような印象を抱いたのか分析している。一面に西洋化された香港を目の当たりにした書院生は、植民地経営者であるイギリスに対し、羨望や嫉妬などが相混ざった感情を抱いた。そのような彼らの目から見て、現地の日本人や中国人は近代化の遅れた者に映った。

第九章では、大調査旅行で東南アジアのコースを選択した書院生に着目し、彼らが調査の過程で現地の在留日本人とどう触れ合い、彼らをどう見ていたのか分析し、そこから東南アジアの当時の日本人社会の変化について論じている。

第一〇章では、一九二〇年代から三〇年代にかけて、日本の満洲進出が本格化するなか、満洲を調査した書院生の記述にどのような変化がみられたのか、その変化から書院生が満洲の日本人社会をどのように見たのか検討している。同章では、書院生の記述から、日本人が満洲に進出するにともない、現地で排日運動が激しくなったこと、満洲に来た日本人が現地社会と溶け込まず、もっぱら日本人同士で関係を築いていたこと、「娘子軍」といわれた日本人売春婦の姿が満洲各地で見られるようになったことなどが明らかにされた。

第一一章では、大調査旅行で台湾を訪れた書院生がどのような体験をしたのかを追っている。書院生は台湾で温泉や神社、近代的な工場を見学し、植民地に作られた「日本」を体感した。また、彼らは台湾の先住民族についても調査を試みた。そのとき、彼らが注目したのは、日本がもたらした近代化の影響を受けた先住民族の姿であった。

第一二章では、大調査旅行の途中で朝鮮半島に立ち寄った書院生が、朝鮮人社会をどのように見たのか論じている。書院生は日本の植民地であった朝鮮半島で、前章の台湾と同じく、さまざまな「日本」に触れた。その一方、書院生たちは朝鮮人の反日感情にも関心を向け、朝鮮に対する日本側の優越意識を疑問視した。

本書の成果と課題

東亜同文書院の大調査旅行は、中国大陸はもとより、朝鮮・台湾、さらには東南アジアまでを範囲とした。そのため、今日、一個人の研究で大調査旅行の全貌を明らかにすることは容易でない。すなわち、ミクロ的視点からの研究は盛んに行われるが、それらを包括するようなマクロ的視点からの研究が充分でない。本書は、大調査旅行を北方、南方、日本の勢力圏の三つに分け、それぞれの地域を専門とする研究者が共同して考察に取り組んだことで、その研究の欠落部分を補う役目を果たした。

また、ミクロ的視点からの研究についても、歴史学以外の分野の研究者が参加したことにより、これまでにない観点からの成果が生まれた。とりわけ、第七章の日本食文化研究を専門とする須川の考察は特徴的である。須川の論考は、大調査旅行研究だけでなく、東亜同文書院研究にもまだ新たな角度からの考察が可能であることを示唆している。

本書は、大調査旅行の全体像を捉えたことにより、調査をする書院生の新たな姿を映し出した。調査地域の差異による調査内容や書院生が抱いた印象の違いは当然あるが、一方で、興味深い点は、調査地域が異なっていても、書院生の関心が共通して現地に住む日本人に向けられたということである。

たとえば、日本の満洲進出を機に日本人移住者が増加していた赤峰市を調査した書院生の記録には、日本人以外の民族のことについて記録がほとんどされていなかった。このことを第五章で取り上げた高木は、書院生が在留邦人にばかり目を向けた理由を「書院生にとり赤峰のイメージは日本人と直結し、彼らは過酷な陸行を経てやってきたオアシスに桃源郷や故郷である日本の姿を重ね合わせている」（九七頁）と考察している。

香港を調査した書院生は、ほぼ例外なく日本人経営の旅館に宿泊し、在留邦人が主催する歓迎会で供された日本料理に舌鼓を打った。そして、赤峰の調査の場合と同様、書院生の現地の中国人に対する関心は低く、塩山によると、「中国エキスパートとして養成された彼らの学問の集大成における記述にしてからが、実は香港で圧倒的多数を占めている中国系住民やそのコミュニティーに対しては、記述の割合から言えば「いない」に等しいくらいの扱いでしかな」（一六五頁）かった。

東南アジアを調査に回った書院生も、現地日本人の様子を細かく記録している。東南アジアの場合は、現地で中国語が通じなかったため、自然と日本人のコミュニティーに近づかなければならないという事情があった。

書院生たちが接した日本人コミュニティーも中国社会の一部であったことに違いないが、そこに関心を向けるあまり、本来関心を向けるべき現地の中国人社会に関心を示さなかったことは問題ではなかったのか。このような大調査旅行が抱えていた問題点は、本書のように各分野の研究者による比較研究によって初めて浮き彫りになったといえる。

東亜同文書院研究の問題点のひとつに、関連史料の不足がある。これは、東亜同文書院がたびたび戦火に巻き込まれて書類が散逸したり、戦後、学校のほとんどの物品が中国側に接収されたことなどが原因の一端にあると思われる。しかし、大調査旅行については、幸いにして、報告書と『大旅行誌』にまとめられている。そして、本書各章の研究は、いずれもこれら史料の分析に費やしている。

書院生の調査に問題があったことは上述したが、その影響が報告書や『大旅行誌』に及んでいることは、あらかじめ考慮しておかなければならない。本書第二章で『大旅行誌』の史料的価値を分析した荒武達朗は、次のように述べて警鐘を鳴らしている。

『大旅行誌』は決して〝打ち出の小槌〟なのではなく数ある史料群の一つと位置づけるべきである。書院生の見聞は疑いも無く貴重なものであるが、彼らの記述を無批判に称揚し、それを当時の中国を反映したものとして理解することは厳に慎まねばならない。もしこのように東亜同文書院とその事績を神聖化、伝説

化するのであれば、それはかつて東亜同文書院に向けられた「スパイ学校」という一面的な評価、全面否定とさほど変わらぬ精神に基づくものである」（四八頁）。

このように、大調査旅行の史料に徹底的な批判を加えることで、かえって、本書の学術的価値を高めている。

最後に、本書のやや問題と思われる点を二つ挙げる。一点目に、上述のとおり、本書では考察の範囲を北方、南方、日本の勢力圏と三つに分けた。そのうち、北方については、三つの研究がともに内モンゴルを対象にしている。

北方に大調査旅行に出た書院生は、内モンゴルだけでなく、ウルムチやイリなど、新疆方面にも足を延ばしている。三つの研究のうち、二つが内モンゴル史を専門とする研究者（ウリジトクトフ、暁敏）によるものであったため、自然と内モンゴルに研究の比重が置かれたことはやむを得ない。

しかし、大調査旅行の全容を探るとするなら、北方だけでなく西北にまで範囲を広げて、新疆やチベット方面の事例も考察すべきであったのではないだろうか。

二点目は、上述の荒武も指摘しているが、東亜同文書院は、一部で以前から「スパイ学校」と名指しされていた。これは大調査旅行をしていた書院生が中国側からスパイ活動をしていたのではないかという疑いからそう言われた。しかしながら、大調査旅行がスパイ活動でなかったことは、本書を一読すれば明らかである。

「スパイ学校」という根拠のない評価にいちいち反論することはないと思われているが、今でも東亜同文書院は「スパイ学校」であるという見方がひとり歩きし、大調査旅行の歴史的評価が歪められているのも事実である。大調査旅行を総括した本書で、その点の言及や批判を加えてもよかったのではないか。

若干の問題をはらみつつも、本書が大調査旅行研究、および東亜同文書院研究に寄与するところは大きく、本書の成果をもとに、さらに大調査旅行の実像の解明、さらには、その歴史的意義の議論が深まることに期待したい。

注

〈1〉藤田佳久『日中に懸ける――東亜同文書院の群像』中日新聞社、二〇一二年、二三二頁。

〈2〉各巻のタイトル、出版社、出版年は以下のとおり。なお全巻とも藤田佳久編著。第一巻『中国との出会い』愛知大学、一九九四年。第二巻『中国を歩く』愛知大学、一九九五年。第三巻『中国を越えて』大明堂、一九九八年。第四巻『中国を記録する』大明堂、二〇〇二年。第五巻『満州を駆ける』不二出版、二〇一一年。